

アジールと自死、脳の変容
堀江 幸生 (Horie Sachio)
名古屋大学大学院情報学部社会報科学専攻

※聴講の際の注意事項 はじめに、自死に関する内容を含んでいるので、精神的に不安定であったり、心配になる方はご注意ください。本稿は決して自死を肯定するものではありません。

人は、延命と同時に自死というような人生の長さを意識的に制御することができる。自死は、人の歴史において人生のひとつの選択肢である。人以外の動物は、親族の利他的な理由で自分自身に致命的な行動をとることがあるが、人の自死に相当するものは存在しない。例えば毒蛇は自分の毒の免疫をもっている。自死とは、共同体の死亡原因として必ず一定の割合を占めていることが明らかなように、人が自らと共同体との間に人生が値しないものと論理的に決断する理由を生みだしている結果であろう。

自死を間違っていると言う理由のひとつが、犠牲者がもつ生きる権利を剥奪することであるとすれば、継続的な人生がその人にとって最善の利益にはならないと自らが判断した時には、生きる権利を自ら放棄することは合理的ではないか。

社会の中には、確率的に生きていてもどうしようもないと言う状況におかれる人が一定数存在する。マーク・フィッシャーは、加速主義を唱えるひとりであった。生前、フィッシャーは、資本主義リアリズムにおいて資本主義における不可避な自己の商品化について考えていた。この意味は、自分自身を社会に商品として捧げることを意味する。

現代において、私たちの社会との契約はこれ以上でも以下でもない。私たちは生れながらにして負債を背負っているのである。これを生の負債と呼ぼう。

この社会で、私たちは怠惰であることは許されない。セーフティネットが機能していないので逃げ道はない。すべての失敗は自助努力の欠如、過ちは許されない。社会的な成功を求められ、資本主義への貢献だけが人生の成功として許容される、果てしない競争の中で敗者が生まれ、敗者には社会的に無価値と言う絶望だけが待っている。

そのような社会で、自死は自己に価値を見出す資格を失った者の消極的な逃避手段であり、また出生は生の負債を新たに生む行為である。生の負債を負わないためには、人生を今この時辞めることが合理的となる。それは生きることそのものが苦痛になるからである。

しかしながら、自死は良い解決方法だろうか、私たちには逃げ場がないのであろうか。1970年代後半、歴史学者の網野善彦と阿部謹也によって、日本と西洋に歴史上存在した様々なアジールが紹介された。アジールとは一般に、庇護を享受できる神聖な平和の場であり、前近代社会においては世界各地にアジールが数多く見出される。旧約聖書に登場する過失致死犯の「逃れの町」や、離縁を望む女性が駆け込んだ鎌倉の東慶寺などがその例である。2010年には、網野と阿部がともにアジール論の基本文献として参照していたドイツの法制

史家ヘンスラーの「アジール その歴史と諸形態」の邦訳が刊行された。

アジールは通常、国家の権力が社会の全領域に貫徹する近代以降には消滅したとされる。そして、国家主権に基礎を置いた大使館や時効制度などの形で、あるいは収容所などの形で、アジールは今も存在している。のみならず、管理が緻密化し閉塞感の強まる現代社会において、新たなアジールの創出も希求されている。

ここでは、議論の出発点として、ヘンスラーを参照してアジールを定義しておく。ヘンスラーは法制史上の「アジール法」を「1 人の人間が、特定の空間、人間、ないし時間と関係することによって、持続的あるいは一時的に不可侵なものとなる、その拘束力をそなえた形態」と定義している。「法」に相当する「拘束力をそなえた形態」の部分を省き、また、庇護を提供する平和の場としての機能を重視し、さらに近代以降の世俗的なアジールも包括できるように、本稿ではアジールを「人間の心身に脅威からの庇護をもたらす空間的・時間的・人的な平和の場」と定義する。これにより、前近代の宗教的アジールから近現代の大使館や収容施設や難民庇護にいたるまでの領域がアジール論の射程として画定される。

希死念慮を抱く人の中には、自らの商品価値がゼロだと思える場合もあるし、そもそも生産能力が極端に低い場合もある。このような状況下で生き残る限り果たすべく社会契約も履行できないことがわかる。自分の存在が血縁者もしくは共同体において害になる。これを多くの人は役立たずと呼ぶ。したがってこのような状況下で自死は生じるのである。

自死は生殖能力と同じくらい道徳的に重要であると見なすことが社会的に重要である。出生は人に負債のかかる人生を差し出す行為であり、その負債は自死をもってして望ましい棄却として引き換えることができる。

現代においてのアジールとは、前述した射程を超えて自死をも含むと考える。なぜならば、希死念慮を抱くものにとって彼らが安心できるような場を提供することが、この射程では届かないからである。

そこで、私は脳そのものに物理的、化学的な手法で、人の精神を文脈から切り離し限りなく苦痛を取り除いた世界の完成を目指す。精神の制御は、ロバート・ガルブレイス・ヒースによって証明されている。その世界が自死に替わるアジールである。希死念慮を抱くものにおいては、経済的事情など困窮している場合もあるので、彼らの生活も保障されなければならないのは言うまでもない。アジールによるこそ。